

恭子の声「それも覚えてない？ マジか」

千歌（M）「あの後、私、どうしてたんだろ
う。家を飛び出して、鬼火を追いかけて：
：：いや、覚えてる」

千歌の声「誰か、お願い、与三さんを、助けて、お願い、誰か：：：」

千歌（M）「ちゃんと、覚えてる。脳裏に、
蘇ってくる。夢を、夢をみていた：：：与
三兵衛さんが、人柱にされてしまう夢を：
：：：」

千歌「恭子、私もう一度、あの学芸員さんに
会いに行こうと思う。ついて来て」

S E 喫茶店のドアベル（カラン）

満里奈「千歌ちゃんじゃない。いつも売上に
協力してくれて、ありがと」

千歌（M）「一宮は尾州ウールで発展した街。
けれど残念なことに、ノコギリ屋根と呼ば
れた工場が次々と姿を消してる。そんな中、

かつてはママの恋敵だったという満里奈さんが、工場の外観はそのまま、中身は喫茶店に改装、女手一つで文化遺産の継承に努めていた。だからつい、待ち合わせ場所ならここを選んでしまう私」

満里奈「ちなみにママは、真奈美は連れて来なくていいからねッ」

千歌（M）「さて、学芸員の宮川さんはいうと、外回りの途上で、ありがたくも寄ってくれた」

宮川「うくん、人柱について知ってることはさ、全部話したつもりなんだけど」

千歌「本当に、与三兵衛さんは人柱にされちゃったんですか？」

宮川「じつはね、学術的な話をしてしまうと、あれは一種の昔話だから……この時代にはもう、人柱なんてなかったと思う」

千歌「なかった？」

宮川「うん、そんなことはしない」

千歌「そっかあ、よかった……」